

## 会場との意見交換

**参加者** 美唄でグリーンツーリズムに関わっている。受け入れ農家の地域差がある。どう受け入れるかが難しいのではないかと。南幌の場合はいかがですか。

**参加者** 慣れていないだろう。観光農業を目指している農家でも、なかなか実践は出来ていない。研修生などを受け入れ、予約するお客さんへの対応はよいが、ふらっと来る人には戸惑ってしまう。「もてなし」程度が普通の農業者である。

**佐藤氏** 留学中に印象的な思い出がある。ある農家の奥さん曰く「牛の乳搾りよりも都会の人の財布を搾る方が気持ちが良い」。「もてなし」などはどうでも良く、この精神が大事である。

**参加者** 札幌で福祉関連のNPOに在籍している。高齢者も南幌に来たいと言っている。将来、「ふらっと

南幌」と連携できないか。

**濱田代表** 是非、連携しましょう。

**参加者** 宅地がずいぶん売れ残っている。道に掛け合っただけでなかなかないか。

**佐藤氏** 土地は財産なので極力売らない方が賢明だ。農地付き住宅をリースするなど、寄留人口を増やす方法もある。南幌町を愉しむシステムを作るとともに農家との連携を蜜にすることが大切だ。欧米の地価値上がりなどは、金持ちだけの町になってしまう。双方向にならないといけない。湯布院はもう親類関係だ。

次回予告  
アグリルネッサンス南幌フォーラム4  
2月15日開催決定。

## いま「美しい景観」を売り出す好機



前回、パネラーの奥さんが言われた「お金が一番」との言葉は同感。いくら崇高な理念があっても資金がなければ実現は出来ない。加えて法律も時には「敵」となる。特に農地法は「憲法違反」とさえ思う。休耕地に市民農園付きのコテージも作れないのは日本だけだ。従来の物見遊山型の観光は敬遠され、今後は都市と田舎を行き来する二地域居住のツーリズムが主流となる。「販売」だけではなく、「リース」の視点が不可欠。景観さえ良ければ「お金」になるはず。事業成功の基本は「資金」である。

### 「お金が一番」これぞ基本

NPO法人「ふらつと南幌」の設立準備のための「アグリルネッサンスフォーラム」第三弾が、一月二十七日、南幌ビューロー三階会議室で開かれた。基調講演は北海道大学観光学高等研究センター教授の佐藤誠氏。「南幌がめざす交流型まちづくりに向けて」農業連携型ツーリズムの新たな展開の可能性と題して、ご自身の実践経験を赤裸々に語り、終始会場を笑わせるなど楽しい集会となった。

## 佐藤誠さんの横顔



北海道大学観光学学高等研究センター教授。(前熊本大教授)九州ツーリズム大学講師。九州を拠点に「村の命を都市へ。都市の力を村の生業へ」をスローガンに人材育成を目指した現場主義を貫く。教壇にはほとんど立たない変り種の教授。欧州留学時に「金はなくとも自立する人間を作ろう」とブローカーなど商売も経験。現職の博士課程を担当している。著書：「ゆっくりに生きてゆっくりに愉しむ」グリーンライフデーの時代。グリーンライフ(高校教科書)など。

### セカンドホームを愉しむ諸外国

外国では金をかけずにコミュニティライフを愉しんでいる。スウェーデンでは「基礎なし、ポストなし」という法律を守れば、農園付の手作り小屋を無料で二十五年リース可能。当然、宿泊可。グループで「村」を形成、特殊技能の持ち主を優先入村させて「コロニー」化している所もロシアでは「ダーチャ」という小屋はどんな階層でも持っている。六十年代からグループで「自給自足」が前提であれば小屋自体を貸してくれる。米国、英国、フランスなどでは田舎(風光明媚な所)の地価が高騰、都会の人には手が出ないほどだ。

### NPOで実践プロジェクト

自治体とNPOとの協働で「グリーンライフの里」創りを推進している。社会実験の名目で休耕地をNPOが借受け、住めないが農園付きの小屋を建てたりしている。特区指定を取り、ファーム化した所も増えた。九州天草では耕作放棄地を利用してハブ栽培やNPOが建設業にも進出して、地元の人材を雇用している。さらに十年間研究したアジアの薬草を使い、農協の古倉庫を改造、「薬膳レストラン」もオープンする。地元でお金を回すことは昔からの動き。「おいしい仕事は地元へ」がスローガン。近く大雪山麓で産学官の「ヘルスツーリズム」計画を開始。南幌でも「景観を売る」商売をすべきだ。